

単元構成の工夫&対話型学習の構築

～社会科学習の基礎・基本を考える～

片桐 宏

社会科学習では、知識・技能だけではなく、関心・意欲、思考力、判断力、意志決定力を重視することが大切である。それらの基礎・基本となる能力の育成と定着を目指すためには、単元構成や学習課題設定の工夫が必要であり、学習の中に対話型学習を取り入れることで、お互いの学びに共感し、自分の思いや考えをより深めさせることをねらいと位置づけ、本研究テーマを設定した。5年生の社会科学習をすすめた結果、社会的事象に対する学ぶ意欲の向上や知識の獲得が見られたとともに、多角的に社会的事象を考えることで価値判断力が伸長した。その反面、指導者側の単元全体を見通す洞察力や学習課題設定の困難さなどが今後の課題として残った。

キーワード：社会科学習の基礎・基本、単元構成の工夫、対話型学習、ひとり学習

1. はじめに

1.1. 社会科学習の基礎・基本とは

社会科学習では、見える学力（知識・技能）だけではなく、関心・意欲、思考力、判断力、意志決定力といった見えない学力も重視することが必要である。知識の定着を図るには、単に覚えるだけではなく、主体的な追究活動を通して社会的事象と深く関わらなければならない。社会科学習では、指導者が教材を提示し、それを子どもが読み取っていくという授業形態が多い。こうした授業形態では、指導者側の教材研究が中心となって学習がすすみ、子どもたちが主体的に調べ、考える学習にはならない場合が多い。自分なりに思考・判断しながら課題を解決する力だけではなく、調べた内容を自分の言葉で表現する力、学習の成果を自らの生活向上のために生かす力などを身につける必要がある。社会的事象を一面的に調べるのではなく、多角的・多面的にとらえることで、事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育むことも大切である。事象の多くは、立場を変えて見れば異なる見解が生じるものであり、より広い視野から考察・判断でき、子どもの中に個性的な見方や考え方が育っていくのである。

そこで、このような「こだわりをもちながら学習をすすめていける子」をめざす子どもの姿と考え、子どもたちがより主体的に調べ、考えることのできる社会的事象を含めた単元構成を工夫することにした。

また、追究活動をひとり学習で深めるとともに全体学習の場面では、対話型学習を取り入れながら多様な考えに触れ、意見を交換し共有することで社会的事象へのより深い学びが形成されると考えたのである。

1.2. 単元構成の工夫&対話型学習の構築

社会科学習で、子どもたちが主体的に調べ、考える

活動を展開する学習をすすめていく上で単元構成が特に重要である。学年全体を見通した単元構成だけではなく、子どもたちにとっての興味・関心が強く、学ぶ意欲がもてるような単元構成を考える必要がある。1つの単元の中でも、子どもたちが「調べてみたい」・「なぜだろう」・「不思議だな」という気持ちを起こさせる学習過程も大切である。学習がすすむ中では、一人ひとりの主体的な追究活動を通して、社会的事象と深く関わらなければならない。追究活動では、調べたことからどんなことが考えられるか、社会的事象のもつ意味や特色、働きなどをひとり学習で深めるのである。

また、全体学習で話し合う場面では、対話型学習を取り入れることで、多様な考えに触れ、意見交換したり共有したりすることで、社会的事象へのより深い学びがつくられていくと考えている。社会科学習をすすめる上で大切なことは、自分以外の子との学び合いを深める点である。その意味においても対話型学習を構築させたいと考えたのである。

2. 単元構成の工夫&対話型学習の構築に向けて

2.1. 単元構成の工夫について

5年生の学習では、春の「南紀旅行」・「田植え」や秋の「稲刈り」・「社会見学」などの見学や体験学習を視野に入れながら単元を構成した。また、子どもたちの問題意識だけを単に考慮するのではなく、新聞やニュースなどの社会問題にも気を配りながら単元構成を考えるようにしている。1学期は、農業・水産業学習の単元を大きくとらえ、日本の「食料問題」・「食料自給率」に触れ、農業や水産業の特色や実態を把握するとともに、食料生産に従事する人々の工夫や努力などについての考えを深めた。また、日本の食料を確保する上で、世界に目を向ける必要があることにも関連させて考えることができた。2学期は、工業生産の単元

の中で、「住友金属和歌山製鉄所」・「関西国際空港」見学を実施することで、工業生産と運輸・貿易とのつながりを把握させたいと考えた。教科書では、運輸と貿易にあまり触れておらず、日本の産業と生活を考える上で、運輸と貿易の果たす役割や状況を十分に理解できないと考えたのである。また、急激な社会状況の変化などに適合した運輸・貿易などを取り上げることで、世界的な視点で日本の工業を考えることにした。

2.2. 対話型学習の構築について

単元の中で、探究活動を行うひとり学習と、みんなで話し合う全体学習を取り入れながら学習をすすめた。

ひとり学習は、一人ひとりの子どもたちが、課題について意欲的に調べ、考える学習である。問題意識をもって学ぶ態度をはじめ、自分の言葉で表現する力、学習の成果を自らの生活向上に生かす力などが身につくと同時に、社会的事象の意味や働きなどを考える力を育て、調べたことをもとにしながら、一人ひとりの考えが深められる活動でもある。

全体学習は、ひとり学習で調べ、考えた内容を出し合う場面である。学習経過や学習成果を交換・交流させることで多様な考えに触れ、社会的事象へのより深い学びがつけられるのである。このような対話型学習は、討論形式が中心となるが、相手の意見にしっかりと耳を傾け、自分の考えをさらに発展させて発言することが大切になる。対話型学習をすすめる上で、次の4点を大切にしたいと考えた。

(1) 座席表の活用

座席表を活用することで、対話型学習がスムーズにすすむと考えている。自分と同じ考え方をする子、相反する意見をもっている子など、事前に座席表を子どもたちに見せることで、質問事項（わからない点等）を整理することができるし、課題に対して幅広く考えられるという利点が多い。また、自分と同じ考え方の子と共同で発表資料を作成することができる。一人では苦手な発表を複数名でできるという利点もある。指導者側から考えても、一人ひとりの確かな見とりと支援にもつながるのである。

(2) 学習技能の向上

対話型学習をすすめるには、自分の考えを発表する力、相手の考えを聞く力が必要となる。社会科学習では、発表の根拠となる資料を大切にしたいと考えた。「〇〇に書いていた」・「〇〇の資料を見て考えた」といった、対話型学習の共通の基盤をつくるのが大切である。また、聞いている人がわかりやすい話し方にするための工夫も必要である。話し方の上手な子を例に出しながら学習をすすめている。

(3) 学習課題の設定

対話型学習で特に重要なのは、学習課題である。討論形式の学習を行うには、子どもたちの考えが大きく二つに分かれるものが理想である。対話型学習

をすすめることで、対立的なものから多様な考えに広がっていくものが良いと考えている。学習課題は学習をすすめる中で考えられるものであるが、対話型学習をより深められるような、社会的事象に対する共通性のある課題が理想である。

(4) 着目見の設定

1年間を通して着目見を設定し、対話型学習に活かそうと考えた。対話型学習の基盤となるのは、ひとり学習である。ひとり学習をすすめる中で、その子がどんな考え方をもち、何を調べているか、どのような資料を準備しているのか等を把握することで、着目見への見とりや支援につながるのである。この着目見の活動や発言内容、考え方を通して、単元構成や課題の適切さ等を読み解くことができるとも考えたのである。

3. 単元学習の実際

全12時間の学習計画を立て、『日本の貿易と運輸』の学習を行った。以下に実際の授業での様子を述べる。

①第1次…いろいろな輸送方法を考えてみよう。
(1時間) 《全体学習》

貿易と運輸学習の導入段階として輸送手段について考えさせた。輸送手段としてトラック、鉄道、船舶、飛行機等があるが、それぞれの輸送手段の良さや役割について考えさせた。運ぶ製品によって役割や特色があることを話し合った。これらの輸送機関はこの100年余りの間に大きく様変わりしたこと、また近年めざましい発展をとげていることにも触れ、運輸全体として日本の産業の発展に貢献している点を意識して考えさせた。トラック輸送による高速道路の輸送の利便性もよく知っていた。また、工業学習で原料や資源、製品を運ぶ手段として船舶輸送についても理解していた。鉄道や飛行機輸送は人を運ぶ輸送手段としてはよく知っていたが、荷物を運ぶ輸送手段として、あまり身近にとらえていなかった。

②第2次…メイド・イン？
どこの国が一番多いかな？
(家庭学習《ひとり学習》+1時間) 《全体学習》

身の回りにある外国製品を調べることで、外国との貿易を意識させることにした。家庭にある「衣服、電気製品、食器や台所用品、家具やしきもの、遊びやスポーツの道具」という種類について、どんな工業製品がいくつあるかを国別に分けて調べてみることにした。近年、多くの安価な外国製品が日本に大量に輸入されている。集計結果を表にまとめてみた。
《集計の結果》

- 全体で約57%が外国製品。外国製品が多い。
- 中国製品の占める割合は全体の約31%。
日本製品は約43%。
- 「着るもの」では、約44%が中国製品。

日本製品の割合を上回っている。
○「遊びやスポーツの道具」でも中国製品が多い。
日本製品と同じ4.0%である。

③第3次…日本の貿易について調べよう。
(2時間) 《ひとり学習+全体学習》

社会科資料集や教科書の他に、『朝日ジュニア百科年鑑2008』の統計資料を使い、日本の貿易について調べてみた。『朝日ジュニア百科年鑑2008』の統計資料は、輸出入に関する貿易統計が詳しく記載されているので、全員に印刷提示した。子どもたちにとって少し難しい資料ではあるが、日本の貿易の学習に活用できると考えたのである。統計資料の扱い方やグラフの見方などを全体学習の場面で確認した。

《学習のポイント》

- ◎日本の輸入や輸出の様子や特色を考える。
- ◎日本は輸出額の方が多い。貿易黒字が続いている。そのため外国から「日本はもっと製品を多く輸入」と注文をつけられている。
- ◎日本は「加工貿易」で経済大国になった。

④第4次…関西国際空港を見学しよう。
(2時間) ……社会見学

社会見学で関西国際空港に行き、まず旅客ターミナルビルで国際線と国内線の旅客搭乗の様子を見学した。また、展望ホールに行き、離着陸する飛行機を間近で見学した。3・4機の飛行機の離着陸する姿がとても大きく見えた。



その後、空港内をバスで見学した。普段では見られない機内食工場や物流の拠点になっている国際貨物地区、燃料タンク、航空機修理工場、税関、空港警察、クリーンセンターなどを車窓から見学した。

関西国際空港を見学したのは、日本の貿易で象徴的な働きをしている空港というだけでなく、関西・西日本地方の産業にとって重要な貿易空港という視点で関西国際空港をとらえたからである。もちろん、子どもたちの生活する和歌山市にも近いという意味合いもある。また、関西国際空港は中国や東南アジア諸国との関係も深いという理由もある。子どもたちにとっての関西国際空港が身近に感じられたことはよかったと感じている。

⑤第5次…関西国際空港の働きについて整理しよう。
(2時間) 《全体学習とひとり学習》

見学前から自分で調べていることや見学で見つけたこと、疑問点などを話し合った。主に貿易に視点

をあてているので空港の様子や環境・交通アクセスだけではなく、主に貨物旅客機や貨物輸送について考えることにした。関西国際空港は24時間眠らない「国際ハブ空港」の特色をもつ空港である。昨年の8月に第二滑走路が完成し、利用する国際貨物輸送が増加し、世界とのつながりも大きくなっている。関空のガイドブックを活用しながら関西国際空港の利便性や利用状況、空港で働く人々の様子について整理した。それだけなら世界とのつながり(貿易面)がわからないので、「関西国際空港ホームページ」や「大阪税関」の資料を印刷提示した。



⑥第6次…クラスの課題を決め、話し合おう。
(4時間) 《全体学習とひとり学習》

日本の貿易や関西国際空港の見学等で学習した事の中から、課題をつくるために話し合った。関西国際空港の利便性、環境や交通アクセス、空港からの輸出入の実態等を中心にした日本の貿易を考えた課題にしたかったが、自分たちにとって切実であるような課題は発見することは難しかった。

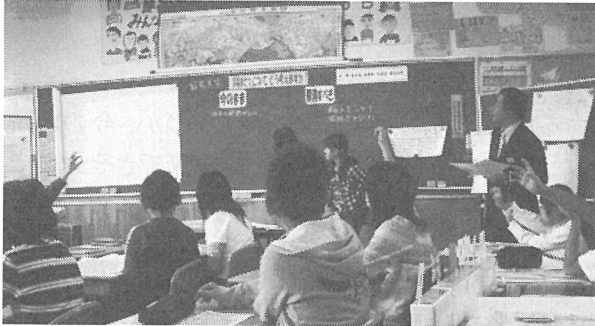
そこで、貿易全体の問題点について課題を設定することにした。関西国際空港の見学で知ったことや空港からの輸出入額、輸出入品目なども関連づけて調べ、考えられれば、日本の貿易全体の姿がいつそう見えてくると考えたのである。今までの学習の中で、「日本全体では輸出額が輸入額よりかなり多い。」「関西国際空港からの輸出額も輸入額より1.9兆円も多い。日本の会社はもうけている。」「以前から日本がたくさんの工業製品を輸出しているので、世界の国々から《貿易まさつ》問題がおきていた。今もあるだろう。」「食糧自給率に問題と、貿易の問題は何かよく似ている。」といった声が出た。そこで、みんなで話し合う課題を次のように決めた。貿易問題の学習は、発展的な課題ではあるが、家庭学習で時間をかけて調べ、考えさせた。

◇学習課題：日本の「貿易まさつ」問題について
どう考えますか？

今のままがいい ・ 解消した方がいい

日本の「貿易黒字」は、年間に約10兆円である。そのことを考慮に入れながら対話型学習を行った。「今のままでいい」派と、「解消した方がいい」派というような討論形式で話し合う中で、様々な考え方が出された。子どもたちは自分の考えの根拠となる様々な資料を準備しながら学習に臨み、自分とは違

う考えには質問をしながら学習をすすめた。前日に全員の考えを記した「座席表」を配布していたので、友だちの考えをしっかりと聞きながら、お互いの学びを充実させていた。根拠となる資料の中に、理解するのに困難な内容や多角的に捉えすぎた資料もあったので、対立的な展開には成りえなかった。



4. 単元構成や対話型学習の考察

上記の『日本の貿易と運輸』単元のねらいは、より広く世界を視野に入れた学習をすすめる中で、日本の工業生産を支えている貿易の働きを理解し、世界の国々との貿易で何が大切であるかを考えることである。

近年、世界のグローバル化が進行し、貿易や運輸はめざましい発展をとげている反面、それぞれの国が及ぼす影響力は大きい。本実践では、工業学習の初めに「製鉄所の働き」を学習し、次に「日本の工業生産と工業地域」で日本の工業の特徴や特色に触れ、最後に『日本の貿易や運輸』を配置することで、日本の工業と世界との結びつきを概観できるような単元を構成した。それに加え、世界との貿易を考える上での「港湾」や「空港」の働きや特色を知ることは重要である。単元の中に「関西国際空港」の見学を取り入れたことで、海外との貿易や運輸の実態を身近に感じることができ、興味・関心がより強くなり、学ぶ意欲も高められたと考えられる。また、具体から抽象へと単元を展開することで、自ら調べ、考える観点を明確にしながら学習をすすめることができたと考えられる。

全体学習につなげるためのひとり学習に重点をおきながら取り組んだが、ひとり学習が予想していたようにすすまなかったのが残念である。その原因として、次のような点が考えられた。

- ①貿易関係のグラフや統計資料などを収集しづらい。指導者側から準備したが、読み取るのに困難であった。また、子どもの意識から距離がありすぎた。
- ②貿易の品目や相手国が多岐にわたっているので、考え方や調べ方が複雑になった。
- ③貿易問題を調べ考え、話し合うことは、子どもたちにとって、切実な身近な課題ではなかった。子どもたちは、身のまわりに外国製品が多いこと、「関西国際空港」は外国（特に中国・東南アジア）との貿易の拠点になっていることは把握していたが、課題設定や③の資料探しの場面では、「少し難しいな

という子も多かった。このことは、課題設定の困難さ・単元全体の見通しの甘さにもつながると反省している。

「貿易まさつ」問題について話し合った場面では、対話型学習で臨んだ。事前に考え方を座席表で把握してみると、課題が難しいのにもかかわらず、個々の追究活動がよくできていた。話し合いの場面では、多様な考え方で出され、貿易問題について多角的・多面的な見方ができたと考えられる。どちらか一方に結論が出ない課題ではあるが、自分の考えだけでなく、相手の立場に立って考えられ、わからない内容についての質問もできていた。また、筋道を立てながら、わかりやすく説明できる子も多かった。ただ、考え方や根拠となる資料が多岐にわたり、理解が難しい内容の考え方や資料もあった。学習をすすめる中で、身近な内容を示した発言場面で、立ち止まりながら、共通した視点で討論できればよかったと考えている。

5. 成果と課題

単元構成については、単元の中に見学や体験活動を取り入れることで、貿易や運輸の実態が身近に捉えることができ、社会的事象に対する学ぶ意欲の向上や知識の獲得が見られた。子どもたちにとって発展的な単元構成であったが、個々によく調べながら学習をすすめていた。ただ、学習課題づくりを視野に入れた単元構成を工夫する点が課題として残った。そのような、単元全体を見通す洞察力が必要と考えている。

対話型学習の基盤となるのが、ひとり学習である。貿易問題について、自分なりに様々な角度から調べ、自分の考えの根拠となる資料を準備することができた。座席表を作成し、事前に配布したことで、発表することが苦手な子も、同じ考えの友だちを見つけ、共同で発表することができた。また、討論形式の学習を行うことで、多角的に社会的事象を考えることができた。自分と相反する考え方をしっかりと聴き、自分の考えを論理的に説明できる子が多くなってきている。この単元で培った力は、社会的事象に対する価値判断力の伸長にもつながり、最近の世界金融問題や社会状況のニュースに興味・関心をもつ子が多くなっている。

今後の課題として、対話型学習をすすめる上でのキーポイントとして、学習課題の重要性があげられる。できるだけ共通の認識をもつ、対立点が明確な学習課題を設定することを心がけたいと考えている。また、司会進行を子どもたちに委ねるといった、多様な討論形式の授業形態も試みたいと考えている。

《参考文献・資料》

- 『社会科授業が対話型になっていますか』
安野 功 明治図書 2006年
- 『社会の見方を鍛える討論の授業』
田中 力 学事出版 2004年
- 『朝日ジュニア百科年鑑2008』 朝日新聞社